

第1部 ウガンダゲストハウス〔土地購入編〕



わくわくは、水などが地中から出てくるさまや、物事が急に表れるさまを意味する「沸く（わく）」から、生まれた言葉と考えられる。

「沸く」は、「興味が沸く」など感情などが生じる際にも使われ、心の中から外へ激しく現れる感情やその様子を「わくわく」と表現したものであろう。

あなたはワクワク生きていますか？

心の底からワクワクしていますか？

自然に起こる好奇心、それがワクワクである。



第1章 日本

1、動機

<豊田編>

21歳の時太平洋を見て自分の小ささを感じ、もっと世界を見てみたいと思った。
その言葉通り、アメリカ、タイ、香港、インド、フランスと世界に触れる事ができた。
自分ではある程度海外に行った事で満足をしていた。
そんな時一人の男が世界一周の旅にでていった。それが、森川寛信だった。
当時はお互いの事は何も知らず集団の中で話す程度だった。

1年後、森川寛信の存在すら忘れていた時、ふとある共通の友人を通して彼が帰ってきた
との情報を得た。実際に世界一周した人の話を聞いてみたい。
僕は携帯で森川君に連絡をとり、1週間後池袋の居酒屋で酒を交わした。

『いやーコロンビアが一番面白いですよ！！』

2時間程度の時間だったが、コロンビア話の話しで終わってしまった。
僕はワクワクした。ワクワクは伝染するのだ。

そして、1年後！！ 大学4年生の春、就職活動中の事だ。
森川寛信が『ウガンダに学校を建てましょう！！』と真面目な顔で誘ってきた。
最初は何を言ってるんだこの人は？と大笑いをしてしまった。
でもその後はウガンダってどこだ？と自然に好奇心が湧き出てきた。
ワクワクしたのだ！

それから頻繁に彼から連絡をくれるようになった。
僕の中で彼は世界一周を通して様々な経験をしてきた強い人だった。
何でも知っている、何でもできる人。
そんな彼が僕を本気で頼ってきているのが伝わってきた。
『本気でウガンダに学校を建てたいです。一人じゃできないです。
力を貸して下さい。』
彼から聞いた初めての弱音の言葉。彼からの初めてのお願い。
僕の心は自然と傾いていった。

そんな時、第一候補の超一流会社の最終面談中、ある質問がとんできた
『今後の学生生活はどう過ごすの？』

僕は『友達とウガンダに学校を建てます。』ととっさに言ってしまった。

『本当にできるのですか？』 『いつから計画していたのですか？』

『資金はあるのですか？』 『建設した後どうするのですか？』

と怒涛のような質問が返ってきた。

すべての答えは『やってみなければ分かりません』

その大人は『無理だ！！』という一言を残し、僕は面談に落ちた。

やってきた事しか評価されない現実社会！！この会社だったら一生働いてみたいと思った会社の社員からの一言に僕の子供心に火がついた。

超一流の会社に勤めても将来子供に頭越しに『無理だ』と自分の価値観だけで物事を言うような大人になりたくない。

ワクワクは時には論理を超える。本来その人の本質がもつ右脳が判断しているのだ。

このワクワクを証明するためにプロジェクト決定を決意した。

その日人生で二回目になる僕から森川寛信への電話をかけた。

『ウガンダに学校を建てよう。有言実行しよう！！』

それが二人で交わした初めての約束だった。

＜森川編＞

二年前の僕のコロンビア計画は失敗に終わった。悔しかった。

日本に帰国した後は不完全な日々を過ごす自分がいた。なにか打ち込めるものが欲しい。
何にかにワクワクしたい。

だが何も思い浮かばぬまま月日は流れていった。そんなある夜、ベランダで夜空を眺めながらふと思い出した。

アフリカのウガンダに滞在していた時、カバレのビジツアーズホテルというゲストハウスで、夜従業員のウガンダ人青年と同じ夜空を見ながら語り合ったことを。

「ここに学校を建ててくれ それが俺の夢だ」

そのときは、なんとも思わず聞き流した言葉が、急に自分にとってワクワクすることのよ
うに聞こえた。

ワクワクは50パーセントの経験と50パーセントのチャレンジから生まれる。

その基準が僕にとっては今まで経験した事のない事！！

ワクワクを目の見える形に残す事！！

コロンビアでイベント開催に失敗した。悔しさを学んだ。

その悔しさを超えるワクワクが欲しかった。

それが海外で建物を建てる事であった！！

同じ言葉を聞いてもワクワクする人とワクワクしない人がいる。

ワクワクはその人独自のセンサーなのだ！

その日から、「ウガンダ」という言葉が僕のモチベーションの源泉になった。

でも一人でできるのだろうか。僕は仲間を探すことにした。

「ウガンダに学校を建てよう」

こう誘われたら、大抵の人はきょとんとして呆気にとられてしまうだろう。

この言葉を笑い飛ばせるヤツじゃないと無理だろうな、というのが自分の中での仲間探しの
ルールだった。同じワクワクのセンサーを持っている人。

それが、スポールブールという当時馬の骨ともつかぬスポーツの世界選手権出場世界14
位という輝かしい実績を持つ豊田想だった。

「ウガンダに学校を建てましょう！！」

笑い飛ばされた。

でもその瞬間僕は確信した。

僕等のワクワクストーリーの始まりを。

僕等はワクワクしない事はしない。

行動の全ての原点がワクワクにあるからだ！！

こうして僕等のワクワクストーリーは幕を開けた。

2、資金

ウガンダに学校を建てる。

そう決めてから、僕等の目に飛び込んできた一つの言葉がある。

「ソーシャルアントレプレナー（社会起業家）」

インターネットでこの言葉を検索すると、上の方に、社会起業家ビジネスプランコンテストを発見した。まずは書類審査ここで1000通の応募から10通に絞られる。

次に本物のソーシャルアントレプレナー（社会起業家）の前でプレゼンテーション審査をする。プレゼンテーション審査に合格したプランが最終選考に進める。

そして優勝するとなんと最大50万円の補助金が出る。

その補助金に惹かれ書類審査である事業計画書を作成し応募することに決めた。

事業計画書作成に一番重要なこと6W3Hを入念に検討した。

What 学校を建てる

When 卒業まで

Where ウガンダに

Who 森川寛信 豊田想

Why ワクワクするため（学校を建ててくれとウガンダ人に言われたから）

Whom ウガンダ人のために

How

How much

How far

「W」の要素は決定したが、「H」の要素が決まらない。

決まらないものにもアイディアがでてこないのだ。

それはそうだ。現地の建設手法も物価もわからない。

結局現地に行って調査するしかないのだ。

答えのないHOWを探すのか、それとも自分定めたHOWに向かって行動するのか、僕等は後者を選択した。

そして、超難関の書類審査を通過した。

自分達がやろうとしている事は間違っていないのか。

客観的に審査され認められた事が僕のモチベーションを持ち上げていった。

プレゼンテーションの期日までの間に、事業計画のブラッシュアップのため第一線で活躍しているソーシャルアントレプレナー（社会起業家）の事業立案講座等多数の講座を聴講した。普通にお金を払って受講したら、数十万はかかる講座がソーシャルアントレプレナーの卵ということで全て無料受講する事ができる。

ソーシャルプレナー（社会起業家）の講義を受講し学んだ事がある。

ソーシャルプレナー（社会起業家）で一番重要な事はWhyだ！

Why が自分のためなのか、社会のためなのか。

ソーシャルプレナー（社会起業家）とは社会のためを前提に考える必要がある。

本物のソーシャルプレナー（社会起業家）に聞かれた。

『本当にアフリカに学校が必要なのか』

それは現地の人の事を考えての重い言葉だった。

僕等はWHY？アフリカに学校を建てるのだろう。

自分のため？アフリカのため？それともまだ見えぬ何かのため？

答えのないWHYに心の中で葛藤がおきた。自分達がやっている事は間違っているのか。

いままでの海外旅行は好きな所に行って好きな事をやってきた。

そしてそれなりのワクワクを得てきた。

でも今回はただの旅行ではない。個人ではなく多くの人に関わるプランだ。

一回目の現地調査に向かう直前にプレゼンテーションが開催された。

結局WHYの部分は未解決のままで、必然的に審査員の共感を得ることができず、
プレゼンテーション審査に落選した。

絶望の中にいる僕等を見かねてか、

一人のソーシャルプレナー（社会起業家）が話しかけてきた。

『 ソーシャルプレナー（社会起業家）という立場では君達のプランは共感する事ができなかった。でも個人的な立場では胸をはってこのプランを進めて欲しい。

誰のためでもいい。それが分からなかったら自分自身のためでもいい。

一所懸命に取り組んだ体験がのちのち君達の人生に生きてくるだろう

君達のチャレンジするという心に間違いはない。』

資金集めのために応募した社会起業家ビジネスプランコンテスト。

でも僕等はお金以上の経験を体験した。

第2章 アフリカでの待ち合わせ

<森川編>

2年ぶりに訪れたケニアの首都ナイロビは、昔に比べて随分と治安もよくなっている。2年前は昼間のダウンタウンを出歩くのにも緊張感漂う街だったが、いまでは夜間でも現地人と一緒ならばダウンタウンの貧民地区の酒屋にも行けるほどになっている。大統領が変わった事が原因だった。日本では、首相が変わって政策が変わっても、国民は影響を感じない人が多い。でもアフリカでは、経済が悪い、治安が悪いはすべて大統領のせいになる。大統領が変われば生活が変わると彼らは信じている。

2年前と同じ、プラネットサファリという安宿にチェックインした。ナイロビのメインストリートに面した雑居ビルの8階にある。さすがアフリカ、エレベータが壊れているときが多く、その時は大きな荷物を持って階段で登らないといけないから本当につらい。エレベータで10秒、階段では10分かかる。アフリカ人は半分の5分で登れる。彼らの身体能力はずば抜けている。

豊田想君は既に2週間前にアフリカにきていた。

私とはこのプラネットサファリで、会うことになっている。まるで渋谷ハチ公前で待ち合わせているような雰囲気だ。人と人とが会うだけでわくわくする事はめったにない。

これから起こる想像もできない出来事が僕等をワクワクさせていた。

なにも計算できない土地それがアフリカだからだ。

早速彼にメールを送信した。

『今無事にプラネットサファリに到着しました。生きていたら会いましょう。』

彼は今どこにいるのだろうか？

■ ゲストハウス事情（ケニア）

ナイロビから到着した翌日一つの違和感が私を襲った。2年前より明らかにベット数が減っている。そうプラネットサファリの旅行者が激減しているのだ。アフリカ全体の旅行者が減っているのか。この2年の間に何があったのだろうか。その答えはすぐに出た。

エレベータの故障がない隣のビル9階に、プライムタイムという競合安宿ができていたのだ。しかも、プラネットサファリはお湯がでないが、プライムタイムはお湯ができる。

（海外の安宿に泊まる時、お湯が使えるか使えないかの差は大きい。アフリカでは基本的にお湯は使えない。田舎町に行くと、お湯どころかシャワーすらなく、汲み置きの泥水を指差されてシャワーだ、と言われたこともある。）

プラネットサファリもプライムタイムも、収益構造は、宿泊料金ではなく、サファリツアーの料金だ。ゲストハウスというよりもトラベルエージェンシーなのだ。宿泊料は一泊〇〇Kshしかとれないが、サファリツアーは一泊あたり50～60ドルももらえる。原価がいくらなのかは不明だが、最初は60ドル以上でふっかけられる。(人によって最初の料金も違う)どこまで下げられるかはその人の交渉力次第だ。

ただ、色々話を聞く感じだと、一日当たり50ドル以下には下がらないようだ。

恐らくそこが損益分岐点だと分析した。

ただ、このへんもまだ交渉の余地があって、ツアーに行くから、宿泊費を無料にしてくれ、とかいう交渉の余地はある。私はサファリツアーに行くつもりはなかったが、どこまで値切れるか試してみた。サファリ1日当たり50ドルプラス3日分までは宿泊費をタダプラス荷物預かりは完全無料にできた。

また、この二つの安宿にはなぜか、共有スペースにタクシードライバーや意味不明のケニア人がたむろしている。彼らは、基本タクシーでどこか近場に観光に連れて行くための客引きだ。比較的良心的な価格でやってくれる上に、この安宿のオーナーの許可をとっているの、安心できる。タクシーでぼったくられたり危ない目にあうケースは少なくないことを考えると、タクシードライバーが常駐しているのはかなり便利なサービスだ。

ここでびっくりしたのは、2年前にお世話になったタクシードライバーに再会したことだ。当時、私はナイロビからウガンダカンパラ行きバスチケットを購入し、バスの時間を待っていた。ただ、バスターミナルがナイロビの中でもかなり治安の悪いダウタウンにあったため、そこまでの移動手段どうしようか頭を悩ませていた。深夜のナイロビの街は、とても一人で、ましてや重い荷物を持って歩ける場所ではない。

たまに聞こえる銃声、女性の叫び声、男性の呻き声。私がある街を歩いていたら歩く宝石だ。そこで、短距離だったらタクシーを使うことにしたのだ。

そのときに僕を乗せてくれた彼女も、2年経って昇進し、現在はドライバーではなく、ドライバーを束ねるマネージャーになっていた。とはいっても、束ねられていたドライバーは彼女の夫達だった。

いろいろ考えているうちにどうやら疲れてしまったようだ。数少ないベット上で旅の疲れを癒すようにうとうとしてしまった。

しかしそんな私を一人の日本人が現実へと引き戻す。

『今、ワクワク生きていますか?』

コロンブス(豊田想)はアメリカの原住民(森川寛信)を発見した。

＜豊田編＞

初めてのアフリカ、私の胸は期待と不安が交錯していた。

殺されるのではないか？ 強盗にあうのではないのか？ それがアフリカの人にとって日常の当たり前で発見すらされないのではないのか？

その不安がワクワクとなって返ってくる。

ナイロビ空港に降りた瞬間日本人の姿は消えていた！！僕はまずトイレに行って現金を靴下の裏に隠した。これから何が起こるか分からない。でも信じていたこの決断が間違いではないと言う事を。僕はおよそ2週間後に森川寛信とナイロビの「プラネットサファリ」というゲストハウスで待ち合わせる事になっている。唯一の連絡手段はメールだけ、といってもインターネットが使える環境にあればという話だが・・・

先ず僕は「プラネットサファリ」に向かった。

この宿はアフリカのゲストハウスでは最高級と彼が2年前の情報を教えてくれたからだ。しかし、エレベーターが故障中でビル8階まで階段で登らなきゃいけないし、お湯はでないし、サファリ勧誘でうるさいし、タクシードライバーをまとめている女性は、私は森川と2年前に会った事があると言っているし、なんせ泊まるにもベットが8つしかないのでもう今日は泊まれないと言われた。

しょうがないからの隣プライムタイムに言って見た。

エレベーターも最新だ。お湯もでる。ウガリもご馳走してくれる。ベット数も充実だ。

従業員も可愛い。僕はプライムタイムに宿泊する事を即決めた。

しかし、彼との待ち合わせまで後2週間ある。僕はタンザニアザンジバル島まで足を伸ばす事に決めた。ケニアとタンザニア国境の街ナマンガでは小学校でジャグリングショー、マサイ族との触れ合い、タンザニアアルーシャではサファリに参加し動物のたくましさを垣間見た。

■ゲストハウス事情（タンザニア）

僕はタンザニアのアルーシャという街のゲストハウスに泊まっていた。

この街はサファリの出発拠点になっている街なので比較的観光客が多い。

しかしその観光客を狙っての強盗頻繁にある街だ。

ジョセフは僕が泊まっていたゲストハウスの従業員だった。

「俺の働いているゲストハウスは最高だ。俺はこのゲストハウスが好きだ。オーナーが大好きだ。」それが彼の口癖だった。「今日の夜俺のうちにこないか？」

ジョセフはそう言った。

オッケーと返事を出した30分後に今度はタンザニア女性から一緒にディスコに行こう。

と誘われた……。どうしよう。思わずオッケー。

しかし、ダブルブッキングだー。その現場を見ていたジョセフは、少し寂しげだった。

「ジョセフいくぞ。」俺はそう言ってジョセフとともに彼の家を目指した。ジョセフにとって俺は女より男友達を選んだ男として彼の中で英雄となった。かなりジョセフの機嫌がよくなった。お酒や食べ物を俺におごり始めた。

治安が悪いアルーシャだから夜遊ぶには現地人と一緒にいるのが一番。

案の定ジョセフはいろいろな所や友達を紹介してくれた。

「俺はジョセフだ。俺は地元民族だ。俺はこの地区の事ならなんでも知っている。

お前は好きな事をしろ。俺が全部許可する。」なんて頼もしい言葉だ。たしかにジョセフはかなりの大男。けんかになっても簡単には負けそうにない。時間は深夜0時を回っているが安心だ。

「俺はジョセフだ。俺は地元民族だ。俺はこの地区の事ならなんでも知っている。お前は好きな事をしろ。俺が全部許可する。マサイ民族がいるぞ。写真とるか？」

うん、うん。頼もしい。しかし写真を撮ろうとすると満面笑みの俺達とは対象にまったく怒ったお人がずっとにらんでいる。ジャンボー と声をかけても無視される。

ちょっとやばいぞこいつは……。その男が近づいてくる。

「俺はこの店の用心棒だ。お前は何をしたいんだ。もし写真を撮りたいなら金を遣せ。」

その事件から雰囲気が変わった。深夜街を歩いていると明らかに昼間とは違った人種の人たちが……。笑顔がない、殺気を感じるとはこの事だ。外国人に愛想がいい昼間人はどこへ……。そこにジョセフが追い討ちをかける。大声で、

「俺はジョセフだ。俺は地元民族だ。俺はこの地区の事ならなんでも知っている。

お前は好きな事をしろ。俺が全部許可する。」

おい。それはさっき聞いたよ……。まさかこいつ酔っ払ってるんじゃないか……

「俺はジョセフだ。俺はイラク民族だ。俺はこの地区の事ならなんでも知っている。お前は好きな事をしろ。俺が全部許可する。」

そういいながら派手にこけるジョセフ……。こうなるとまさにジョセフはやっかいものだ。目立ちすぎるし、明らかに目つきの悪いやつらに絡み始めてる。まさに飼い猫に腕をちぎられた気分。あたりは真っ暗、たまに通る人はキセイをあげている。自分で宿に戻ろうにももうここが何処だかも分からない。それどころかココは戦場だ。明らかに感じる殺気。彼らにしたら まさに俺は歩く小判。まだ生まれたばかりのころ僕は母乳が喉につまり真っ青になって病院に運ばれた。そして医者もう助からないと言っらしい。高校の時喘息でいきなり息ができなくなった。当然のできごとながら死を感じた。生きたいと心から想った。そして、アフリカで死を意識した。いつ誰が襲ってきてもおかしくない状況。死んだら終わりだ。生きるのだ。僕は生きて宿に戻った。そして、1週間後僕はもう一度同じ宿に泊まったがジョセフがいない。オーナーに聞くと彼は 売上400円を盗んだ事が見つかり首になったという。「俺の働いているゲストハウスは最高だ。俺はこのゲストハウスが好きだ。オーナーが大好きだ。」彼の口癖はもう聞けない。

ある日、メールボックスに一通のメールが届いていた。

『今無事にプラネットサファリに到着しました。生きていたら会いましょう。』

えっ、もう着いたの……

今私はケニアの隣国タンザニアのリゾート地ザンジバル島で海の幸を楽しんでいる！

森川寛信には現地に先に行ってリサーチしてきますと言って企画書作りをまかせてきた。

とにかくナイロビに戻るしかない！！

僕はフェリー、バスを利用し2日かけてナイロビにたどり着いた。

ナイロビの「プラネットサファリ」に着くと一人の日本人が倒れたように寝ていた。

ナイロビの町が怖くて外に出られないのだろうか？

確かに僕が最初にナイロビに来た時も現実逃避するために仮眠を繰り返した時期もあった。

でもそれじゃーいけない。

僕は勇気を振り絞って一人の日本人に声をかけた。

『今ワクワク生きていますか？』

それが日本から遠く離れたケニアでの森川寛信との再会だった。

コロンブス（森川寛信）はアメリカの原住民（豊田想）によって発見された。

第三章 ケニアからウガンダへ

ナイロビからウガンダの首都カンパラまでは、直通のバスが出ている。片道 15 時間で約 20 ドル。そのカンパラからさらにバスで 15 時間の所に今回の目的地カバレがある。そのたった 30 時間の間にも今後起きるであろうワクワクの前兆が垣間見れた。

■バナナ王国ウガンダ

ウガンダはバナナの国だ。国土の 80% がバナナの木で覆われている。ウガンダ国内をバスで移動していると、かつてチャーチルがウガンダのことを「緑の真珠」と呼んだのがよくわかる。見渡す限りのバナナの木。まさにバナナ王国だ。家もなにもなくただひたすらバナナの木が見える。いったい誰が収穫しているのだろうか。

無類のバナナ好きの僕等が、ゲストハウス建設地としてバナナ王国ウガンダを選んだのは、至極当然の選択だったのかもしれない。

そんなウガンダだから、もちろんバナナは安くて美味い。市場では、特大のバナナ一房（約 20 本）が 800～1000 Ush で買える。一本当たり 50 Ush、日本円にして、3 円程度でバナナ一房が手に入るのだ。毎日のように市場に行ってバナナの大人買いをして、その日のうちには完食するという生活が続いた。

また、長いバスの中のおやつとしてもバナナは最適だ。バスの中でバナナを食べるときには、暗黙のルール（？）がある。食後の皮は、窓から投げる事。ルールなのかなんなのかわからないけれど、みんな窓からバナナの皮を投げている。バナナの皮はほっておけば土にかえるし、なぜか微笑ましい光景である。僕等もウガンダで、長距離バスに乗って暇なときなんかは、バナナの皮を窓から投げることが快感だった。ただ、帰国後も、公園などでバナナを食べていると、バナナの皮はごみ箱じゃなくてそのへんに投げしておくものだという習慣になってしまい、困ってはいるけれど。

余談だが、帰国後、ある雑誌でウガンダの記事を目にした。（それは世界中のいろんな新聞から面白い記事をまとめて隔週で発行している雑誌だ。）

＊バナナの木を植える男

「大きな穴だらけの道路が長年修復されていないことに怒ったウガンダの住民が、穴にバナナの木を植え始めた。これに町の人々は大喜び、この際、芋や豆も植えて道路の穴を埋め尽くしてしまおう、と盛り上がっている。」

まさに、ウガンダのお国柄を表すようなエピソードだ。

■血まみれ事件の男

ウガンダのバス＜マタトゥと呼ばれている＞は運転手1名、料金回収マン1名でなりたっている。マタトゥは常に定員オーバーのため料金回収マンはドアを開けて半分外に出ながら立っている事が多い。彼らは体中に傷があり、マタトゥ中の荒くれ者の乗客を仕切っているつわものだ！！大量の荷物を運んだり、料金を支払わないものを退治したり、マタトゥを狙ってくる強盗と戦い。ときにはマタトゥの行く手を邪魔するライオンと戦っているのかもしれない。

そんな彼らの収入源が乗客からもらえる乗車料金だ。そして料金回収マンが料金を回収するタイミングはそれぞれである。乗ってすぐ回収する者、途中で回収する者、最後に回収する者、この時は途中で回収するタイプだった。僕の隣に座っていたおっちゃんは金がなくただ乗りしていた客だった。

料金回収マンが回収に来たときおっちゃんは、金はないと言っていた。

困った料金回収マンが僕にお金を払えと言ってきた。

『お前がお金を払わないとこの親父はここから突き落とされるぞ。』

時速100キロで走っているマタトゥから突き落とされる恐怖と、

深夜1時を回って真っ暗なアフリカの大地に一人に残される恐怖！！

そして何より体中傷だらけの料金回収マンににらまれる恐怖が一番怖いだろう。

俺はこのおっちゃんのために2000ウガンダシリング（120円くらい）を払った方がいいのか。悩んでいると料金回収マンとおっちゃんが口論になっている。

料金回収マンがおっちゃんをマタトゥから突き落とそうとする。

そして・・・ ドスっという大きな音になった。

落ちた・・・

しかしおっちゃんは俺の隣で笑っている。落ちたのは料金回収マンだった。

異変に気付く慌ててストップする運転車。

次に料金回収マンを見たときには体中から大量の出血をしていた。

彼らは毎日命がけで働いている。

一週間に3回はこのように落とされるという。

彼らの体中傷だらけなのが始めて分かった瞬間だった

■全財産喪失の危機

ウガンダでは休憩時間終了時間が着たら乗客が全員着席したかどうかなど関係なくバスの運転手都合で出発してしまう。

僕等がバス降りて休憩していると僕等の目の前を僕等のバスが通った気がした。

まさか・・・、

僕等はバスが泊まっていた場所まで走って戻った。

しかしバスはない。やはりさっきのバスだ！

全荷物、全財産をバスに置いておいたので、かなり焦った。

ウガンダで何にもしないうちに帰ることになるのか？

しかも深夜で回りは真っ暗で有る。

後からきたバスを捕まえて事情を話し猛スピードで追ってもらった。

どの道を行っているか分からない・・・

もしかしたらバスの乗客員が僕らのバックをあさっているかもしれない・・・

そんな心配をよそに僕らのバスに奇跡的に追いついたのは2時間後だった。

第4章 ウガンダのカバレ到着

2004年9月12日(日)早朝5時僕らはバス停のすぐ近くにあるビジツアーズホテルに到着した。まず僕等は現地の交通、言語、宿泊場所等を調査した。

1、現地調査

■交通

比較的道が整備されている場所で長距離移動であれば、大型バスが走っている。とはいってもゆうに50年は越えていそうな年季の入ったものが多い。当然、ドアなんかもついていないことが多々ある。

また、比較的短距離の移動であれば、乗り合いバスが便利だ。どちらも、カンパラ⇒カバレ間の7、8時間で12000Ush(800円くらい)だ。もちろん、道が整備されていない場合には、定期便が出ていない場合もある。そんな場合は、ピックアップトラックと交渉して乗っけてもらうのが手取り早い。アフリカの大地を、風を全身で受け止めながら前進するのはなかなか爽快である。また、町の中を移動する場合には、大きな町であれば、もちろんタクシーが走っているが、それ以上にバイクタクシーが便利だ。ただこちらは、もし乗っているときにこのオンボロバイクが止まったりでもしたらどうするんだろう、という疑問はつきない。逆に小さな町になると、バイクタクシーよりもバイシクルタクシーが一般的になってくる。カバレではまさにこのバイシクルタクシーが一般的な交通手段だ。バイクタクシーやタクシーでもそうだが、便利なメーターなんてものがついていないわけではない。だいたい時間や距離で相場が決まっているらしいが、相場がよく分からない旅行者にとっては事前交渉が基本だ。また、しばらくいるとだいたい相場も分かってくるのだが、特に悪気のない運転手でも、旅行者には平気でふっかけてくるので、やはり事前交渉をなくてはならない。面白いのは、このバイシクルタクシーの名前で、カバレでは「ボダボダ」と呼ばれている。だから、現地でバイシクルタクシーに乗るときは、道でボダボダに向かって、「ボダボ〜ダ」と叫ぶのだ。だいたいボダボダ屋は、そこまで仕事もないので、町の中心部の一角に常にたむろしておしゃべりしている。そのくせ仕事があると食いついてくるので、ボダボダ屋を呼んでから、今日はどのボダボダ屋にするかを決めなくてはならない。計3ヶ月くらいカバレに滞在したが、その間毎日のようにボダボダを愛用しまくっていたにも関わらず、おそらく同じボダボダ屋に二回あたったことはほぼないだろう。人口〇〇人のこの町に、いったいボダボダ屋は何人いるのだろうか、疑問だ。また、同じ発音を二回繰り返すのは、アフリカの現地語(最もメジャーなのはスワヒリ語、ここカバレではチャガ語という言語が使われている)ではポピュラーで、バイクのことは、ピキピ

キ（彼らに言わせると、バイクで走るときに、ハンドルをこうやってピキピキするだろ？とのこのだった。何がどうなったらピキピキという発音になるのかは一切不明）という。また先程引き合いにだした乗り合いタクシーだが、これは国によって呼び方が違う。デフォルトはマタツウ、ナイロビではそういわれている。しかし、ケニアの真下にあるタンザニアに行くと、同じ乗り合いタクシーが「ダラダラ」になり、西アフリカに行くと「トロトロ」になる。日本人が聞くと、どう考えても馬鹿にしているようにしか思えないネーミングである。しかも、「ダラダラ」ではなく、「ダラダ〜ラ」と言った方がネイティブっぽく聞こえるところもまたたまらない。

■言語

ウガンダのカバレではチャガ語というアフリカでもこの地区しか通じないローカル語が存在する。

・アガンディー

カバレタウンの挨拶はこの言葉『アガンディー』、日本語では『元気？』

道行く人に『アガンディー』と挨拶をする。

すると必ずこの言葉が返ってくる『ニジ』、日本語では『もちろん元気です。』

どんな嫌なことがあっても『元気？』と聞かれたら『もちろん元気です』という習慣がこの街にはある。そういつているうちに自然と元気が沸きでてくる。

言葉の習慣とは凄いものである。

・ニマルンジ

カバレタウンの女性にはこの言葉がよく似合う『ニチルンジ』、日本語では『可愛いね』

道行く女性に『ニチルンジ』と挨拶する。

無視する女性、何言っているのと笑顔になる女性、本気だと思って恥ずかしがる女性。

その『ニチルンジ』を超える言葉を発見した。その名も『ニマルンジ』

女性を褒める最上級の言葉で日本では表す事ができないという。

僕等がその言葉を使用する事はなかった・・・

・ポランポラン

カバレに時間という概念はない。バスが定着に来ることはなく5、6時間は待たされる。銀行は気分次第でOPENだし、気分しだいでCLOSEだ。

そんなカバレに似合う言葉が『ポランポラン』、日本語だと『ゆっくりゆっくり』、スワヒリ語で『ポレポレ』

交渉事になるとさすがのアフリカ人も焦りがでてくる。感情的になる時もでてくる。

そんな時僕等はゆっくりとこの言葉を繰り返す。

『ポ・ラ・ン・ポ・ラ・ン』

・ ニタルデ

『煮たるで！！』と言ってその男は僕等の前から去って行った。最初その言葉を聞いた時にはなんて事をいう人だ！とびっくりした記憶がある。

しかしこの言葉の意味は『ニタルデ』日本語で『必ず戻ってくる』だった。

カバレでは多くの人に会った。多くの人との出会いがその数時間後には別れと変わる。その人達に別れ際に贈る言葉がこの言葉である。

・ エチネチチ

『エチネチチ』は日本語では『何これ？』。

カバレタウンにはぱっと見た目では何か分からないものが多く存在した。

僕等は指を指しては『エチネチチ』と尋ねていた。

『エチネチチ』とある事をカバレタウンの人に尋ねてみた。

僕等の指の先には女性の『Hな乳があった。』

・ モノンガ

『モノンガ』一見とんでもない化け物を想像してしまう言葉だが、

日本語では『ありがとう』。この言葉をカバレの方にいうとみんなが笑顔になる。

『ウェバリー モノンガ』というともっと笑顔になる。『本当にありがとう』という言葉が彼らに伝わるからだ。

■ ゲストハウス事情（カバレ）

僕等が宿泊しているビジツアーズホテルには3人の従業員がいる。

ウォッシングマンは22歳で仕事はホテル部屋のベットや枕のシーツ洗って干す役目である。それと同時に僕等の洗濯物も洗ってもたっていた。彼と会話をすると常に、私は貧乏だ。私を日本に連れて行ってくれ、お金をくれ、物をくれと言って来る。そんな時僕等真剣に意見を言う。日本も昔貧しかった。焼け野原だった。でも日本人は働いた。自分達を信じて、自分達の国を信じて、苦しかったけど豊かという夢を求めて国中が働いた。ほんの50年前の話だ。君もできる。その内容の会話を一日二回、合計30回は話し合っていた。

アセイムは19歳でビジツアーズホテルのレストランウェイターである。彼は働きながら大学の資金を貯めている苦労人である。彼が唯一外出できるのは月曜日だけで、宿泊簿を政府に届けに行く時だけで、それ以外は基本的に外出禁止である。

ビジツアーズホテルは一階がレストランになっているためオーダーはアセイムがとる。

オーダー表を見て欲しいものをいうと70パーセントの確立でノット アベイラベル。（それは不可能だ）この言葉が返ってくる。材料常にストックされてないからだ。

フルーツサラダを頼むと近くの店からパイナップルやバナナ、リンゴを調達し、ビックマンに渡すのである。

ビックマンは28歳で、ビジツアーズホテルの料理人である。彼はカバレ1のビックマン。身長2メートル、体重100キロはゆうにあるだろう。しかし、彼はとにかく優しく僕等を調理場に呼び込んで唯で肉やコーヒーを飲ませてくれた。しかしその調理場は1畳ほどで、太陽の光もこない、もちろんライトなどない。料理の注文が入るとき、火を燃やせるため唯一光がともるがそこは室温100度のサウナと激変する。そしてチキンの注文が入るとその場で鶏の首を切って血を見ながら丸焼きにする。彼はいつも僕らにこう言う。

I have not seen ブルー sky for one year. Here is real jail.

（俺は1年間青い空を見ていない。ここは本当の刑務所だ。）

2、 目的整理

ビジツアーズホテルは今回のプロジェクトきっかけとなるゲストハウスだった。

ビジツアーズホテルの従業員が言った言葉『ここに学校を建ててくれ!!!』

その一言から始まったプロジェクト。ウガンダ人の青年の言葉が日本人を動かしたのだ！しかし彼はもうビジツアーズホテルで働いてはいなかった。彼の名前も連絡先も知らない、結局彼に会うのは諦めた。

現在の従業員に聞いても2年前の事は知らないと言われるだけだった。

でも彼は確かにいったのだ『ここに学校を建ててくれ』と。

僕等はまずこのホテルを拠点として今後の日程を確認しあった。

今回カバレ滞在日程は10日間。その間に「**人脈の確保**」と「**土地の確保**」の

2点に重点をおいた。

10日間で何ができるかわからない。でもその二つだけは成し遂げる事を誓い合った。

第5章 ウマルとの出会い

今回のウガンダプロジェクト最大のキーマンであるウマルとの出会いは偶然であり、必然だった。学校建設のためにまずは現地の生徒事情を知る事が必要だ。

僕等は＜ジャグリング＞と＜スポールボール＞を切り口に人脈を確保しようと行動したその中で僕等に一番興味を持ってくれたのがウマル少年だった。

そしてその出会いがこのプロジェクトを大きく変えた。

1、 ジャグリング



どこの国に行ってもストリートパフォーマンスをやると、一番興味を持ってくれるのは好奇心旺盛でネットワークが多い人だ。

だからストリートパフォーマンスをやることにした。最初の舞台は、宿泊地ビジツアーズホテル二階ベランダ。ここはカバレタウン中心地だから、必然的にいつも人が多い。ボダボダ屋やタクシードライバー、あとは暇人かがいつもここにたむろしてる。案の定、始めてから30秒もたたないうちに彼らの喝采を浴びた。

「よっしゃ、掴みはOK。」とりあえずこれで、ボダボダ屋とかタクシードライバーには顔が売れた。

まずは幼稚園。お昼時だったので、いきなりズカズカと入り込んでみる。先生に挨拶して、さっそくパフォーマンスの許可をもらう。

お手玉をしながらリングを食べると幼稚園児は満面の笑みで拍手を送ってくれた。

調子に乗って次の候補地を探してみる。すると小学校見つけた。昼の授業中らしく、静まりかえっている。校庭らしきところを見ると、珍しい外国人にみんな注目しだした。ちょうどそのとき前を通っていたクラスでは、見るからに怖そうな先生が生徒を前に呼び出し怒鳴りつけていた。しかし、生徒たちの異変に気付いた先生。生徒たちはみんな、先生のことを怖がるより外国人である僕たちを珍しそうに見ている。先生とも目があった。怒りの矛先を失った先生は、若干きまずそうに、こっちを見る。僕らを目が合った。そして先

生とかるく挨拶をする。

「いやあ、はるばるよくきてくれた。もし見学をしたいのならいま授業中だから、校長の許可をとってくれないか。さあ、あっちが校長室だ。」

早い話が追っ払われた。校長室に掛け合ってみるものの、パフォーマンスの許可はおりなかった。残念だがまた他のパフォーマンス場所を探すことにした。そして、16時頃、遅い昼食にしようと思っていったんビジツアーズに帰ろうと歩いているときに、僕らと呼ばれ止めたのがウマルだった。

「さっきはありがとう」先程教室の前で先生に怒鳴られていた生徒だった。その一言が、ウマルとの出会いだった。

2、スポールブル

僕等がウマルと仲良くなったきっかけは、スポールブル大会の開催を通じてだった。

スポールブルのボールは1kgが計4個。ただでさえ重い荷物に加えて、この重さ。さらに、税関ではこれはなんだ、爆発物か、といちいち質問される面倒くささ。

その試練を耐えたものだけが許されるウガンダでのスポールブル大会開催。

どこの国に行ってもスポーツを一緒にやると直ぐに打ち解ける事ができる。

打ち解けた中でなら有意義な人脈ネットワークを構成できるのではないかという目的で大会を開催した。

カバレタウン真ん中には、スタジアムがある。たまにイベントが行われるらしいが、なんのイベントをやるのかはよく分からなかった。早速ウマルにもスポールブルを教えてあげることにした。いままで見たことがない鉄球にとっても興味を持っていた。聞いてみると、カバレではスポーツは、サッカーとバレーしかない。それ以外のスポーツを単純に知らない。そんな話をしていると、ちょうど学校の授業でも終わったのか、スタジアムに人が集まってきた。ここは学生達の放課後のたまり場になっている。見慣れぬスポーツをしている外国人に興味を持ったらしく、これはなんだと盛んに聞いてくる。せっかくだから彼らに教えていると、どこから噂が広まったのか、瞬く間に100人くらいの人が集まってきた。ルールがいたって単純なのが幸いして、特に難しい説明もいらず、みんながルールを理解したようだ。小一時間ほど彼らとスポールブルをしていると、怖い顔をした男が一人入ってきた。

「おまえらちょっとこい」

仕方ないからいくことにした。スタジアム近くの掘っ立て小屋に連れて行かれた。いきなり、「俺はここの管理人だ、だから金を払え」と言ってくる。なにかにつけてワイロを要求してくるこの腐敗政治め、と思いながら、絶対ワイロなんかわたすものかとかたくなにノーと言い続けた。30分くらい交渉したあげく、結局決裂して、この日にスタジアムを使用するのは諦めることにした。集まってくれた100人に対しては、事情を説明して帰ってもらうことになった。ただ、なんかこのまま終わるのも残念だった。

そこで、「来週の土曜日13時からこのスタジアムで、スポールブル大会を開催致します。友達を呼んでみんなで、来て下さい！！」とスポールブル大会開催の告知をした。100人の学生たちは、歓声をあげて帰って行った。

僕らはウマルと一緒に帰路に着く。小さな町なので、スタジアムから宿泊先のビジツアーズホテルまでは徒歩10分くらい。帰り道ウマルに、さっきの男はなんだったのだと尋ねられる。

「いや、金を払って要求されて困った」という話をしたら、ウマルは、「そやそうだ。なんでもあそこはちゃんと管理所があって、なにかイベントかなにかで使用したい場合は、

事前の許可とお金があるんだ」

なるほど、さっきの管理人は決してワイロを要求していたわけではなかったのだな、と納得して、かなり口論になったことを申し訳なく思った。

スタジアムを借りるのにいったいいくらかかるのか知らないが、とりあえず来週の土曜日にスポールブール大会を開催すると言ってしまったので、予約をしなければならない状況になった。翌日その管理事務所に行ってみることにした。ほんとだ、昨日連れて行かれた掘っ立て小屋じゃなくて、ちゃんとした管理事務所がある。しかも、何かイベントらしきものが開催されているような書類も貼ってある。とにかく、さっそく相談してみることにした。

「ここで来週の土曜日にスポーツ大会を開催したいんだけど」

すると案外あっさり、じゃあこのフォーマットに記入して、という返事が返ってきた。名前や生年月日、イベントの内容など、日本で何かを申し込むときのフォーマットとほぼ同じだ。それを記入してから、そういえばいくらかかるの、と尋ねた。そこが一番大事だ。まあせいぜい10ドルくらいだろう、なんて思いながら。蓋をあけてみると、土曜日は半日借りただけで100,000Ush、約5000円だ。この広さのスタジアムならば別に驚くようなものではないかもしれないが、ウガンダの物価からしたら破格だろう。まあ日本で言えば、東京ドームを借りるようなものかもしれない。

さんざんその場で迷ったあげく、保留にすることにした。ゲストハウス建設の貴重な軍資金をこんなところで浪費するわけにはいかない。他に場所を探すことにした。とりあえずビジツアーズに戻って昼飯を食べているときに、ウマルが学校の昼休みを抜け出して遊びに来た。さっそくスタジアムが借りられなかったことを相談してみる。ならうちの小学校のグラウンドを使ってはどうだ、といわれた。でもウマルの小学校は先生が厳しくてジャグリングショーすらできなかった学校だ。スポールブール大会なんてやらせてくれるようにはとても思えない。「いや、自分が通っている学校じゃなくてうちの学校だ、僕のママは学校の先生なんだ、その小学校の校庭ならば大丈夫だ。」その言葉を聞いて早速放課後、ウマルの家に行ってみることにした。

場所は、ビジツアーズのすぐ裏手だった。徒歩3分くらい。たしかに広大な校庭があった。そして、その校庭の横手に数件家が建っていた。おそらく学校関係者の家族はみんなここに住んでいるのだろう。だいたいどこに行っても学校関係者は、学校敷地内に家が保証されていた。アフリカで教育者というのは相当ステータスのある職なのだろう。

ウマルのお母さんは、外国人である僕らの突然の来訪に驚きつつも、暖かく迎えてくれた。チャイをご馳走になりながら、チャガ語（現地語）や、ウガンダ、日本の話をした。ウマルのお父さんはウガンダの隣国ルワンダ人で、国に帰ってしまったこと、ウマルのお姉さんはカンパラにある高等学校に行っていて寮生活をしているということなども聞いた。こうしたコミュニケーションを通しながら自然とウマルは僕等にとって最高の友達となった。

第6章 学校建設からゲストハウス建設へ

日本では『本当にアフリカに学校が必要なのか』と問いただされた。

僕等は何も答えられなかった。

そして現地に實際来て幼稚園、小学校、大学を観た。

学校関係者はけして僕等に学校を建てて欲しいとは言わなかった。

僕等に何かを寄付して欲しいとは言わなかった。

彼らが僕等に要求したのは『僕等の存在だった』

僕等ら日本人との出会いが彼らにとって魅力的な授業だった。

僕等はこの地区に学校は必要なのだろうか？と疑問を持つようになってきた。

1、 現地学校事情

現地の小学校では英語できちとした授業をやり、教科書等も汚いながらきちんとそろっている。

小学校の数は足りているか？と問い合わせても十分すぎる足りている。

学校に通えない子もいるのじゃないのか？と問いただしても確かにこない子もいるが原因はトイレが汚いから来たくないという甘えた子供が多いという。

大学には小さいながら図書館があり、教室が有り、パソコンがあり、インターネットができた。夏休みという事で生徒はいなかったがしっかりとした設備だった。

学長に学校を建てたいという事を話すとではここに新しい校舎を建ててくれ。

という軽い返事が返ってきた。

現地を知れば知るほど現地にニーズがないことが分かってきた。

2、 決断

そんな時に学校の先生の子であるウマルに相談した。

ウマルからは予想外の答えが返ってきた。

『学校を作るのは簡単だ！お金さえ払えばなんでもできる。

でも学校はだたの手段であり目的ではない。

学校を通して何を伝えたいのが重要だ！！ その考えがあるの？』

ウマルは真剣に答えてくれた。そして僕等の心に問いただした。

僕等は何も答えることができなかった。

現地に来て初めて分かった事がある。

現地には学校を建てて欲しいという必要性がないという事だ！

確かにアフリカに学校が足りない地域はたくさんある。

でも少なくともこの地域には必要がなかった。

現地にきて初めて悩んだ事がある。

僕等は何を伝えたいために学校を建てようとしたんだ。

日本で悩んだことは、

どんな学校を建てればいいのか？カリキュラムはどうすればいいんだ？

先生は？生徒は？運営はどうしたらいいのか？建設資金は？運用資金は？

でも結果的に現地には学校を建てて欲しいというニーズすらなかった。

僕等が本当に悩まなきゃいけない事は何を伝えたいかだった。

現地に来て初めて学んだ事がある。

机上の空論はもうやめようよ。そう遠く離れたアフリカの現地が教えてくれた。

僕等は真剣に考えた。何を伝えたいのだ！！

ワクワクするとき人は最も多く学ぶ

『僕らがやりたい事は海外でワクワクを形にする事。』

それは何故かと言うと僕等がワクワクするし、それを見た人もワク

ワクする。その話を聞いた人もワクワクする。

そんなワクワクするようなストーリーを作りたいだけ。

もう難しい事は考えない。僕等がワクワクするような事をやろう。

そしてみんなにワクワクを伝えよう！』

僕等はワクワクを伝える決断をした。

そのメッセージを伝えるために僕等はゲストハウス建築という手段を選らんだ！』

このワクワクを伝えるためには多くの日本人にこの地に来て欲しいと思ったからだ。

想像のワクワクストーリーから現実のワクワクストーリーにいつでもたどり着けるドラマを作りたかった。ワクワクを形にするために。



第7章 ゲストハウス建設に向けて

現地の人に『この辺りにゲストハウスを建てたいのだけど・・・』と聞くと、

＜俺を雇え。＞

＜俺がすべて仕切ってやる。資金はいくらだ＞

＜俺がオーナーになる。お前は日本から旅行客を連れてこい＞

＜俺を日本に連れていけ。＞

＜俺の土地をやる、ここから走って3日かかるが・・・＞

と全く前に進まない。

そもそもニーズはあるのか？そして人脈をどう作ればいいのか？

そして二つを調査した。

1、 現地ゲストハウスのニーズ

現地にはゲストハウスのニーズはあった。カバレの財政は観光収入で賄われていたのだ。

実は、カバレは絶滅寸前のマウンテンゴリラツアーに行くことができる唯一のスポットでもある。マウンテンゴリラが生息しているのは、世界でもウガンダ、ルワンダ、旧ザイールの国境地帯だけだ。ルワンダや旧ザイールからもマウンテンゴリラツアーに行くことが、内戦の影響などで実際はほぼカバレからしか行くことができない。マウンテンゴリラツアーはすごい勢いで年々高騰している。2年前に初めて訪れたときには、150ドル。それでも高いと思って参加しなかったのだが、夏に行ったときには、300ドル。そのときは、次くるときには500ドルになっているから早めに行った方がいいぞと言われた。まさかそんなはずはないだろうと思って今回調べたところ、350ドル。確実に値上がりしている。需要があれば金額も上がる、しかしヨーロッパからの観光客が多く、

日本からの観光客は大半がルワンダへの通過点として素通るだけだ。

もし日本人が建てたゲストハウスがあるとカバレを通りかかった日本人が聞いたら、大半の人は行きたくなるだろう。そのためにかかる交通費、食費、ホテル代、ツアー代すべてがカバレの人々に還元される事になる。

この本を読んだ人ももしかしたら数年後にはカバレのゲストハウスに行きたくなるかもしれない。そして、ウガンダのカバレの人々にとっては遠く離れた日本人が来て、日本のリアルな話を聞いた方が勉強になるのだ。

2、人財調査

■ ワーカー

カバレタウンにある唯一のディスコその名も『EARTHQUICK』（地球で踊る）毎週水曜日と土曜日の深夜23時から営業スタートする。

元気な信頼できる若者を見つけてワーカーとして雇いたいと思っていた。僕等はワーカーを探すという目的でこのディスコの前に来ていた。入場料は5000ウガンダシリング（約200円）予想通り中には多くの若者がたむろしている。アフリカのディスコには観光客を狙ったマラヤという売春婦の女の子が積極的に声をかけてくる。彼女達の殆どが病氣持ちだと聞いていた。田舎街のディスコで目立つ日本人、すぐに人気物になった。30分くらい踊っていると気付いたら一人の男性がずっとそばにいる。その男性を巻き込んで一緒にふざけあっていった。その男性は俺がトイレに行くとトイレまでついてくる。おー外国人がそんなに珍しいかぁー。と軽く思っていた僕等。

僕等がドリンクを買いにカウンターに行くとその男性が奢ってくれた。

ちょっと休んで飲んでいると彼の手が僕の手に当たる。そして彼は俺の手を握り始めた・・・。

ホモだ！俺は直感的に思った。俺がさりげなく手を離すと彼もさりげなく手を握りなおす。

これが後に〇〇事件を起こすことになるエリックとの衝撃的な出会いだった。

エリックと離れる為にはどうすればいいのか。僕等がノンケだという事を証明すればいいんだ。すぐさまガールを探し始めた。

彼女はルワンダ出身の20歳、ダンスを申し込むとうれしそうに近寄ってきた。というよりむしろ彼女の方から申し込んできたと言ってもいい。これはマラヤだ。ホモとマラヤどっちを選ぶか？僕はマラヤとのダンスを選択した。10分近く踊っていると彼女は明日8時にあなたが泊まっているホテルに行くといいです。深夜3時ごろ僕等は『EARTHQUICK』を後にしゲストハウスへ自転車タクシーで向かった。すると今度は別の女性が明らかに後をつけてきた。なぜだ・・・、ビジツアーズホテルにつくと彼女の自転車タクシーも同じ場所に止まった。まさか部屋に泊まるのか？期待と不安が喉を通る。部屋に戻ろうとすると彼女も部屋に入ろうとする。まさに四面楚歌・・・、走って部屋に入り部屋の鍵をしめる。間一髪で彼女から逃れる事ができた。5分くらい彼女がガンガンとドアを激しくノックする。なにが目的なのだ・・・。暫くして音が闇終わりやっとう安堵の睡眠が訪れた。それも束の間、次の日には昨日のルワンダガールが僕の部屋にくると言っていた・・・。勢い余ってゲストハウスの名前を言ってしまった事を後悔してももう遅い。

次の日深夜23時にビジツアーズホテル帰ってきた。彼女の姿は見当たらなかった。彼女は本当に夜20時にきたのだろうか・・・？僕にはそれを知ることができないし、怖くて知りたくもない。

でもこれだけははっきりとしている。アフリカにも大人の学校が存在する。

■ 従業員

カバレにはツアリズム専門の専門学校がある。観光客をターゲットにしたビジネスが彼らの生活を支えているので、自然と将来ガイドを目指す若者が日々熱心に勉強している。

彼らにとって観光客でない先生が教える授業より、観光客から得る生の情報の方がためになるのではないのか？というかつてな仮説をもとにインターシップとしてゲストハウス建設を手伝ってくれる人材を探しにこの専門学校を訪れた。

学校はすでに講義が始まっていた。20人程の生徒が授業を聞いていて前の生徒は必死にノートにメモをとっている。真ん中の生徒は僕の存在に気づきこっちへ来いと手招きをする余裕がある。後ろの生徒は夢の中で授業を受けている。

僕が真ん中の席に座っても先生はまったく無関心で授業を続けている。

それどころかさらに熱弁をふるっていた。

アフリカの学校と聞くと先生が足りなく充実した授業が受けられないと勝手に思っていた。

しかし今まで僕が日本の学校では教えてくれなかった事をアフリカの先生から教わった。

先生は力強く生徒にこう訴えかけた。

『アフリカという故郷を捨てるな。君達は死ぬまでアフリカ人だ。

まずは自覚せよ。そしてアフリカを誇りに想え。そこから君達の人生が始まる。』

第8章 土地探し

1、 レイクブニョニィ

アフリカで土地が欲しい場合はどうすればいいのだろうか？

まずは現地では不動産屋の代わりに役所が土地売買の仲介をしていた。

しかし、タウンの土地はかなり高い。かなり離れた土地なら安いのだが、そんな場所まで観光客はこないだろう。

そんな苦悩な時にウマルにゲストハウス建設を相談してみると・・・

この街のはずれにレイクブニョニィという湖がある。その景色は世界1美しい。もしゲストハウスを建設するならレイクブニョニィの美しさを日本に広めて欲しい！

ウマルとの約束が僕等の心を動かした。とにかくレイクブニョニィに行ってみよう。



そっとガイドブックを開きブニョニィを調べた。

＜ブニョニィ湖と段々畑の美しい風景は、その雰囲気から‘アフリカのスイス’と形容されます。湖面は標高 1,840m に位置し、地滑りによってできたこの断層湖はアフリカ大陸 2 番目の深さを誇ります。ここでは、カヌー・トリップ、ピグミー村見学、バード・ウォッチングなどができます。もうひとつの特色は、湖からとれたザリガニを使った料理です＞これは期待できる。

カバレタウンからマタトゥで 30 分。

何度か山を越えてとうとうマタトゥはレイクブニョニィに到着した！！

広大な山々に広大な湖が見えた瞬間、今までの疲れが吹っ飛んだ気がした。

いままで見た世界中のどの景色よりもきれいで、自然が溢れている。

ここしかない！！ この湖を一目見た瞬間僕らはそう心に決めた。

僕らのワクワクストーリーに相応しい場所が用意されていたのだ。

ワクワクは奇跡をも起こす。

広大な湖の中に 200 以上の島があり、その島の中に学校があり、教会があり、家がある。

彼らにとって主要な移動手段はカヌーだった。

この湖の端はコンゴ国境まで広がっている。カヌーにして 14 時間以上の距離だ。

その日僕等はレイクブニョニィにあるゲストハウスクレタベに宿泊した。





■ダンとの出会い

レイクブニョニィのほとりにあるホテルクレタバー。

ここは今後僕等がホテル建設に向けての重要な情報収集ポイント+休息ポイントとなるホテルだ。5つほどの個室があり、レイクブニョニィが一望できるベストポイントにある。

ホテルクレタバーの総合責任者はダン。

ダンは推定35歳で毎日店のビールを勝手に飲んでいるため腹がでている。

趣味がカメラなので日本製のカメラをくれというのが口癖だ。

彼はウガンダや、レイクブニョニィの歴史を学ぶ他、土地の買い方、ホテルの建て方、従業員のマネージメントの仕方を教えてくれたドルからウガンダシリングへの両替担当も彼の役割だった。



ダンには素直に悩みを話す事になる。レイクブニョニィにホテルを建てたいのだけど、どうすればいいんだ。ダンは言った。

『そんなの簡単だ。レイクブニョニィのよさを日本人に伝える事だ。

お前らがワクワクしなければワクワクは伝わらない。

そのためにはレイクブニョニィを知る必要がある。』

■オベッジとの出会い

オベッチはクレタバーの料理人だ。いつも僕等の無理なオーダーをいやいやながら受けてくれるいい料理人だ。ザリガニ、ナマズ、ウサギ、なんでも料理してくれた。但し、オーダーした後に材料を仕入れるため、彼の口癖はいまから作るから後6時間待ってくれだ。その為常に飯を食い終わった直後に次の食事のオーダーを伝える事にしていた。僕達はこの湖を知るためクレタバーの料理人オベッジの家に行ってみることにした。オベッチは僕等と同じぐらいの年だが、奥さんと生後2ヶ月の女兒がいる。クレタバーからカヌーで20分弱湖のほとりから歩いて10分程にオベッジの家があった。それは土と牛の糞で壁を

つくり、屋根はバナナの皮で作られていた。
オベッジに聞くと2年かけて自分でつくった家だとう。



すぐ後ろを振り返るとレイクブニョニィが一望できるその景色は圧巻だった。
そこから歩いて5分くらい歩くと広さ的には2ヘクタールくらいの土地に着いた。
土地を探しているという僕等にオベッジが土地を売ってくれると言ってきたのだ。
それも100ドルで。安い。さすがウガンダ。
その場は一度保留する事に決めた。
しかしその言葉を聞いて土地探しに現実味がでてきた。
ウガンダでは交渉次第で土地が買える。
ワクワクはお金じゃ買えない。
でもワクワクをする手段としてお金は存在する。

2、ムニャニラ島との出会い

次の日ダンの言葉通りこのレイクブニョニィを知るため、
ダンのツアーに申し込む事になる。

午前中にバードウォッチングをしに近くの島を訪れた。

そして午後に伝説の小人ピグミーに会いに行く事になった。

ピグミー村はカヌーで5時間の距離にあるため

現地のカヌー漕ぎ師ジャクソンを雇ってピグミー村へ行く事になった

この長旅が今後の展開を大きく変える事になる。

ジャクソンは27歳で185センチの長身その長い手を使って僕等をボートへと誘って
くる。珍しい事はワクワクする。



ピグミー村に行く途中のボートの上で、

僕等がジャクソンにあの土地は誰の？聞くと

ジャクソンがこっちの島はスウェーデン人の物だ！！

あっちの島はイングランド人の物だ！！

そっちの島は政府要人の物だ！！

と既にこの湖内の土地が投資目的に購入されている事が分かってきた。

そしてクレタベアから1時間たった時、直径10メートルくらいの島に木が一本生えた島
があった。

ワクワクは時として突然訪れる。



この島がいい。僕はジャクソンに言った。

しかし、ジャクソンは『あれは島じゃない。ただ浮かんでいるだけだ！！』

と言った。そして実際その島に行ってみるとそこは湖に浮いている草地だった。

湖に駄々浮いているだけの草地に一本の木が生えている。

その島には力強いオーラーがあった。



土がないのに木が生えている。

見た目よりもその不思議さに僕は魅了されていった。

その草地はパニッシュメントアイランド（刑務所の島）と呼ばれている。

かつての罪人がその草地においていかれて一生でれる事がない島なのだ。

しかし草地にホテルは建てる事ができない。

僕はこのパニッシュメントアイランドが一望できる島を購入する事に決めた。

その名もムニャニラアイランド！！！！

何も建っていない。誰も住んでいない。無人島だ。

誰もが一度は夢みた無人島での生活！！今夢が現実になろうとしている。

ワクワクは夢をも超える。

パニッシュメントアイランドからカヌーでわずか5分の場所にある場所にある。

南北に400メートルくらい東西に100メートルくらいこの島は誰？
とジャクソンに聞くと金曜日紹介してくれると言う返事が返ってきた。
明後日の金曜日ビジツアーズホテルで待ち合わせという事になった。



その日見たピグミーダンスが僕等のワクワクストーリーに拍車をかけた。
このワクワクをみんなに伝えたい。その思いは日々高まるばかりだった！！

第9章 土地購入

1、パスタとの交渉

ムニャニラアイランドのオーナーがビジツアーズホテルにやってきた。

彼の名はパスタ。教会で牧師をやっている。

世間話をしてから交渉に入る。

英語での交渉もワクワクする。

学校で学んだ英語という教科が今始めて役に立とうとしていた。

パスタ『1ヘクタール 100万円でどうだ!!』

どうする・・・ そんな金ないよな・・・ とりあえずこっちの要求を言ってみよう。

僕等 『高い 5万円!!』

パスタ『あの土地は先祖代々受け継いだ土地だそう簡単に手放す分けにはいかん

いいかあの土地は今他の外国人から120万で買いたいというオファーがきているのだ。俺はできればお前たちにあの土地を譲りたい。90万でどうだ。』

僕たち『1日だけ考えさせてくれ』

英語で相手を交渉する際、こっちは日本語で交渉途中で本音を相談できる点が非常に面白い。どうどうと目の前で本音を言っても相手は何も理解できないのだ。

そうしてパスタは帰っていった。

2、メダットとの交渉

パスタが帰って10分後今度はメダットという男が我々を訪ねてきた。

メダットが言うにはあそこの土地は私のものだと言っている。

ではさっききたパスタという男は何者なんだ。

僕らは騙されていたのか？

メダットと交渉を始めるとどうやら〇〇ウガンダシリングで良いという。

この金額なら手がとどきそうな金額である。

しかし先ほどのパスタといい誰を信じていいのか分からない状況。

とりあえずその場は保留にした。

3、最終交渉

まず僕らは Pasta と メダット という男達を知る事にした。
そしてなんと Pasta と メダット は兄弟だという事が判明した。
その土地は彼らが先祖代々受け継いだ土地で有ることと、
Pasta の土地と メダット の土地が ムニャニラ アイランド に存在する事だった。
たしかに二人とも ムニャニラ アイランド のオーナーだったのだ。
金額的に メダット の土地が得だと判断した僕らは メダット と交渉を始めた。
日本帰国まで後 3 日、残金 5 万円。
僕らは最後の交渉を始めた。確かにここまで来て 5 万の差で土地を買えないのは痛い。
僕等と メダット は交渉を始めた。
上半分のそのまた半分を買えば半額になるのが通常じゃないのか？
その理論で メダット から土地の上半分を手に入れた。
金額はキャッシュで 〇〇ドル、残金 〇〇ドルは今度来た時に払うと約束した。

* 交渉ノート添付

4、土地獲得

無人島という土地の値段には相場がない。その人物の家庭状況や人間関係、心情などで大きく値段が変わってくる。

お金を支払って土地がもらえないと怖い・・・

そう思った僕は弁護士に土地の購入の仕方を尋ねてみた。

- 1、土地のオーナーと交渉し土地を購入する。
- 2、アグリメントを書く
- 3、政府に提出する。
- 4、測量士が土地に来て、土地を測量する。
- 5、土地を登記する。

手数料を払えば弁護士が責任をもってやってくれると言っていたが、土地の値段より高い手数料を提示されたので断った。

しかしそんな心配をよそに土地測量等は現地の人を手伝ってくれた。

他人の土地と自分の土地にやしの木を入れて自分の土地範囲判断するのだ。



測量が終了し土地購入の同意書をもらう。

これで土地が僕等のものになった証拠が存在した。

＊アグリメント添付



第10章 土地購入後

1、スポールブル大会

土地交渉を終えた僕等には再度の大仕事が待っていた。

スポールブルウガンダチャンピオンシップの開催である。開始時間は13時で案内してある。当初スタジアムでと言ってしまったこともあり、スタジアムに人がきているといけないので、13時にスタジアムに行った。余計な心配だったようだ、誰もきていなかった。前回のスポールブル講習会で一番目立っていた自称スーパースター（ラッパーで南アフリカでプロデビュー〈本人曰く〉）はそのへんをウロウロしていたので、声を掛けた。「おい、今日の13時からだぞ」若干あせったような顔で、もちろん覚えている、いまから向かおうと思ったところだ、と彼は応えた。どう見ても忘れていたに違いない。ただとにかく暇だったようなので参加の意思はあるようだ。彼は友達もとても多そうなので、とにかくどんどん友達を連れてきてくれ、と言った。さらに、一週間もいれば、顔なじみはけっこうできてくるものだ。なので、歩いていてどこか見覚えのある顔には、いまから小学校校庭にこい、ということにした。さらに、初日にバーで出会った、インド系アフリカ人（個人商店経営者で金持ち）が車で仲間と連れ立ってドライブしているのにも遭遇した。車といっても、おそらく個人所有のピックアップトラックなのだろうが、日本で言えば六本木を赤いBMWでドライブしているような感覚なのだろう。彼らにも、いまからスポーツ大会を小学校の庭でやるから、友達を連れてきてくれと言った。彼らが何人連れてくるのかよく分からなかったが、とにかくやれることはすべてやった。あとは優勝賞品のケーキ（町で一番美味しいと評判のケーキ屋のケーキだ、ただ、町にケーキ屋は一つしかないのだが）を購入して、小学校の校庭に戻った。すると、いるいる、校庭がうまるくらいとはいかないが、かなりの大人数が校庭を占拠していた。さっきのスーパースターとかウマルがかなり友達を連れてきたらしい。さらに、インド系アフリカ人のピックアップトラックも、10人くらいを乗せて到着した。さっそく、僕らは受付をすることにした。一応大会なので、トーナメント表などはすでにつくってある。64人まで参加可能だ。さらに、受付では参加料として1人100Ushずつもらった。お金をとるのはどうかなとも思ったけれど、賞品もあるし、ということでとってみた。

先週体験してくれた人も半分くらいいたが、残り半分はおそらく人生で初めてスポールブルをやる人達だ。なので、もう一度ルールから教えなくてはならなかった。結局、予定していた13時よりも1時間遅れの14時にスタートすることができた。彼らは時間の遅れなんかまったく気にしていなかったようだ。

試合はかなり盛り上がった。ルールは正式なルールではなく、あえてウガンダ特別ルールとした。スポールブルには、ボールを「投げる」と「転がす」の二つの選択肢があるが、あえて、転がすだけにした。投げるのが本当はスポールブルの醍醐味なのだが、その代

わりとても難しく一朝一夕で覚えられるものではとてもない。逆に、転がす方であれば、うまいへたはあるけれど、誰でも最初から行うことができる。またこの校庭のようなコート（土と雑草）では、かなり地面が凸凹しているので、技術だけでなく運の要素も極めて大きくなる。すると、大人から子どもまでが同じ土俵で楽しむことができる。また、本当は一人4球ずつ投げて1メーヌ、これを何度も繰り返すのだが、あえて一人2球を2メーヌだけの真剣勝負にした。ちゃんとした試合ならば、1試合シングルの場合で1時間くらいかかる。さすがにこの人数ではまわらないだろう。

優勝候補筆頭のはずだったスーパースターがまさかの準々決勝敗退。決勝戦はどちらも今日始めてボールをさわる人たちだった。決勝戦は、それまでの試合とは違って一人4球の2メーヌで行うことにした。自分の試合が終わった人たちも、熱心に試合を見ている。結局チャンピオンになった人が、最後の一球を投げる前に見せた、まさに心臓がとびださんばかりの緊張した顔はとても印象に残っている。

こうして、約4時間かかった第1回スポールブルウガンダチャンピオンシップは幕を閉じた。

■王様と呼ばれた男

カバレタウンに王様と呼ばれた男がいた。

その男はお金も名誉も地位もなかった。

でもカバレタウンでは誰もが知っている存在だった。

何故彼が王様と呼ばれるようになったのか。

それは一つの冗談から始まった。

僕等がカバレタウンの人に『名前は何？』と聞かれると、

森川君は名前が寛信なので、『ヒロ』答える。

そうすると現地の人には森川 = HERO（ヒーロー） = 英雄 と連想する。

それに嫉妬した一人の日本人がウガンダ人に名前を聞かれた。

『お前の名前は？』

彼は日本語でこう答えた。

『王様』です。

2、病

■ マラリア（森川編）

私は、ウガンダチャンピオンシップの途中、妙な寒気に襲われた。ただ、2コートあったので、私と想くんで1コートずつ審判をやっていたので抜けるわけにもいかずだんだん気分が悪くなってくるのをなんとかこらえながら立っていた。チャンピオンシップ終了後、ウマルの家で打ち上げを行ったが、それにも参加せずにホテルの部屋に帰って倒れこむように寝ていた。ウマルやウマルのお母さんが心配して来てくれたりした。

翌日になっても具合は悪くなる一方だったので、僕は近くの病院に行くことにした。医者の第一声が、

「You could be マレリア（君はマラリアの可能性がある）」

と言ってマラリアの薬を処方された。このときはショックで気付かなかったのだが、知らぬ間に、マラリアの可能性ある⇒マラリアに違いない、に変わってしまいマラリアの薬を処方されてしまった。ウマルのお母さんとかに相談すると、マラリアではウガンダではとても一般的な病気なのよとのこと。また、他にも何人か相談したが、マラリアには何度もあったことがある、そんなに心配することはない、などと言っていた。さすがにおかしい、マラリアは下手したら死に至る病かもしれないのに。結局僕は、ここでは、マラリア＝風邪という結論を出した。本当にマラリアかどうかは、血液検査をしないと分からない。またマラリアの症状は風邪とよく似ているので間違いやすいとのこと。

なんでも潜伏期間が長い（約1年）ので、アフリカや南米などのマラリア汚染地域から帰ってきた日本人が、帰国後半年とかしてから発症して、まさかマラリアだと思わないから、風邪だと思っていると、急に容態が悪化して最悪死に至るケースもあるという。ということは、帰国後1年間は気を抜けないと思うと若干気が重くもあるのだが。

結局、マラリア薬を飲んだら2日で完治した。マラリアだったら2日で完治するなんてことはありえない。まあ風邪だったのか、それとも本当にマラリアだったのかを知るすべはいまとなってはないのだが。

■ バクテリア（豊田編）

ウガンダからナイロビに戻ってきて、日本に帰国するまであと2日というときにそれは起こった。いままで何を食っても大丈夫だった鉄の胃袋を持つ男、想さんが倒れたのだ。実は、帰り道のナイロビでは、ゲームミートを食べようという約束をしていた。ゲームミートは、野生動物の肉だ。最近ではフランス語のジビエという言い方の方が有名かもしれない。さらに、ゲームミートは、アフリカでは野生のサバンナで暮らしているような動物が中心になってくる。ゲームミートを出す店はさすがにあまりないのだが、ナイロビほどの大都会になると、「カーニバル」というゲームミート専門の店が一軒だけある。南アフリカが本店で完全に外国人がターゲットのこの店だが、ここでは運がよければキリンやシマウマが食べられる。これは行かねばと思っていたので、かなり期待していた。その約束の日に、なぜか想さんの顔色がすぐれない。要予約でタクシーまで予約してあったのだが、出発直前の夕方になって、ついに想さんが、すいません今日は無理ですと言ってきた。若干やつれた顔には、鉄の胃袋の影も残っていない、さすがに心配になって安静にしているように言ったが、体調はどんどん悪くなるばかりだ。しまいには、「マラリアですよ」とつぶやいている。これはまずいかもしれんと思って、急遽タクシーを呼んでもらって、病院に行くことにした。ラッキーなことにナイロビの病院がそう遠くない距離にあった。（ナイロビということはおそらく東アフリカの病院だろう）タクシーで約15分間、車に揺られながら、しきりに「マラリア」という単語を繰り返し、絶望感にかられている想さんを見て、いたたまれない気持ちになった。到着次第、急患扱いをしてもらい、至急診療してもらおうが、問題が一つ。医療英語が全く分からない。どこがどう苦しいとか、体の器官の名前とかなんて分からない。ほんとにお手上げ状態だった。そんなときたまたま通りがかった日本人の人がいた。ナイロビで日本人に会うのはけっこう珍しい。なんでもナイロビにしばらく住んでいるJICAの人らしく、通訳してもらって、症状を伝えることができた。在住の日本人に感謝、いざというときは本当に頼りになる。

そして、至急検査ルームへ。血液検査を終えて、45分後にまた来いといわれた。深夜の病院で人もほとんどいない。想さんは疲れきったのか、横になって寝ていた。

45分が過ぎた。想さんが診療室に呼ばれ、僕も後を追った。

医者は言った。「ユアー ノット マラリア バット バクテリア」

その瞬間、いままで倒れそうな顔をしていた想さんは大声で叫んだ。

「ええー、マラリアじゃないの！？」

それを聞いた僕や医者がびっくりした。さっきまで「マラリア、マラリア」と呪文のようにつぶやいていた人が、「なんだマラリアじゃないのー」と心の底から残念そうに叫んでいる。よく考えると異様な光景だ。

病は気から、というのは本当だ。 マラリアじゃないと分かった瞬間に、「森川さん、腹が減りました」と言っている。さすがにその日は深夜だったので、さすがにその日はなにも食えなかったが、翌日は昼から食いまくっていた。こうして、ナイロビのメインイベントゲームミートも無事食うことができた。

第 1 1 章 振り返り

日本に帰ってくる飛行機の中で、今回のアフリカでの出来事を振り返ってみた。

現地に本当に学校が必要なのかという疑問を持ってアフリカにきた。

僕等は何も知らないし、誰も知らない。

でも、僕等には＜ジャグリング＞と＜スポールブール＞があった。

その活動を通して多くの人と出会い、そしてウマルと親友になった。

そのウマルが僕等に聞いた、学校を建設して何を伝えたいの？

それは子供からの素直な質問だった。

僕等は悩み答えを出した。僕等の伝えたい事はワクワクだ。

ウガンダ人に、日本人に、そして自分達に

そして、現地を調べるうちに学校建設の必要がない事が分かった。

僕等はプロジェクトを学校建設からゲストハウス建設に変更した。

ウマルとレイクブニョニを日本人に伝える事を約束した。

そしてムニャニラアイランドと出会った。

無人島ムニャニラアイランドを購入し僕等のカバレを発つ日が近付いてきた。

カバレを出るときウマルにお別れを告げにウマルの家に向かった。

しかしウマルの姿はなかった。

そして出発のためビジツアーズホテルに荷物をとりに部屋に戻った。

もうウマルに会えないかもしれない。そう思って扉を開けた時、

ウマルが部屋で待っていた。

ウマルも僕等にお別れをいいにきたのだ。

『また会えるよね。』

今まで強気だったウマルが僕等に見せた初めての弱気の言葉だった。

2年前ビジツアーズホテルの従業員と約束した。

『ここに学校を建ててくれ』

2年の月日を経て約束通りカバレに来た。

そして今度はウマルと約束した。

『僕等は必ずここに戻る』

ワクワクを伝えるために。